

〔ライブラリー〕

COLLABORATIVE CARE

Sally, Hornby
Blackwell Scientific Publications 1993年

本書を著した Hornby は英国のソーシャルワーカーである。彼女は1983年に「Collaboration in social work (Journal of social work practice, 1, 1.)」を發表し、ソーシャルワークでの職種間の連携の重要性について報告している。さらに1993年に発刊した本書では、同一機関内の人間関係のみならず多機関にわたる関係について紹介している。なお、本書で用いられているコラボレーション (collaboration) は、「キョウドウ」と訳され、「共働」「共同」「協同」「協働」などと表現され、用語としては日本国内でも日常的に使われる言葉となりつつある。本書では、コラボレーションは「共通の目的を達成するための援助者間の関係」と定義されている。

本書は15章から構成され、第1章から8章までの「PART I COLLABORATION」では、コラボレイティブケアに参加するすべての人の相互関係について説明している。そして、第9章から15章までの「PART II IDENTITY AND BOUNDARIES」では、コラボレイティブケアで関係をもつすべての人のそれぞれの役割や領域について説明している。すべての章にわたっていくつもの関係や役割が述べられているが、第1章の「Fig.1 THE USER-CENTERED MODEL OF HELP」で示される通り、利用者自身も「SELF-HELPER」として援助者と同様の責任をもちコラボレイティブケアに参加している点は注目できる。利用者自身も同等にケアに参加していると考えゆえに、コラボレイティブケアを阻害する要因として、「利用者の自己責任を過小評価すること」、「利用者が援助過程に無意識に持ちこんでいるものを見逃すこと」など利用者自身の課題が指摘されている。このことは、インフォームドコンセントで、患者や利用者に対する情報提供と説明の必要性が問われるのと同様に患者や利用者自身の責任が問われていくことが示唆される。

また、コラボレイティブケアは、しばしば述べられる多職種によるチームアプローチに類似した印象を持たれるが、従来のチームアプローチが、例えばリハビリ

テーションセンター内や病院内といった同一機関内の関係をイメージさせていたのに比べて、本書のコラボレイションは機関間関係も重視している。また、例えば同じ医師であっても、ホームドクターとリハビリテーションセンターの医師、同じソーシャルワーカーであっても、保健所のワーカーと福祉事務所のワーカーといった具合に、同一職種であっても、所属する機関によってさらに役割を明確にしようとしている。そして、その上で、コラボレイティブケアを阻害する要因として、「他機関や他職種に対する無知」、「専門用語を媒介としたためのコミュニケーションの失敗」、「援助者間の信頼の欠如や対抗意識」、「援助者、利用者それぞれの防衛的態度」、「援助者の役割と社会的位置づけの不安定さ」など、ごく当たり前のことに注目している。このコラボレイションを阻害する要因を、すべて事例を通して説明している点も、本書の大きな特徴である。

今日のわが国のリハビリテーション分野にコラボレイティブケアという概念が導入されているとはいいたい。しかし、地域リハビリテーションが市町村レベルですすめられ、狭いエリアで多くのリハビリテーションスタッフが整備されていくことにより、援助者と利用者及びその家族との間に多くの関係が生じることになる。そして本書で述べられているように、その関係においては援助者が中心的な役割を演じるのではなく、援助者と比べて劣った位置に置かれているとか、援助者の専門分野によってばらばらに取り扱われているかのように利用者を感じさせることがないような、ちょっとした気配りが必要である。

なお、本書は、多職種にまたがる筑波大学夜間大学院の修了生の一部が、「コラボレイティブケア研究会」を発足し、それぞれが抱える臨床現場での課題を考える材料とするため講読したものである。現在のメンバーは、奥宮暁子 (看護婦)・坪井良子 (看護婦)・立川和子 (臨床心理士)・対馬真佐子 (聴能言語士)・小嶋珠実 (社会福祉士) の5名である。

(コラボレイティブケア研究会)